

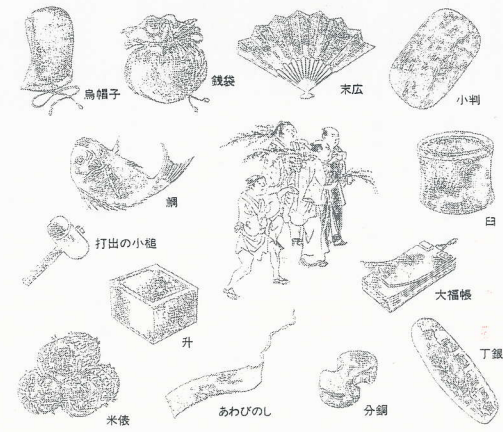
笹は、孟宗竹の枝で、いわゆる群がって生えている笹ではありません。竹は古代から、文学、美術、芸能、民具など日本人の生活とは密接な関係を保ってきました。中でも竹のもつ清浄さ、根強さ、節により苦難に耐え忍ぶ姿、冬も青々とした葉を付け、更に竹林の生命の無限性、旺盛した日本人の竹に対する感性が、色々な神事に笹が用いられることになり、竹取物語のかぐや姫が、竹から生まれるのも同様の信仰から基づいたものです。十日戎の笹も例外ではありません。常に青々とした葉をつけているところに、「いのち」を生み出し続け、「いのち」を常に甦らせている神秘性、その姿は、神道の信仰そのもので、神々のご神徳によって、日々「いのち」が甦り、生成発展している姿を象徴しています。

吉 兆

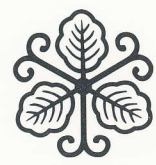
十日戎を象徴するのが、神社から授与される小宝です。小宝は別に「吉兆」(きつきょう)と呼ばれ、銭込(せにかます)・銭袋・末広・小判・丁銀・烏帽子・白・小槌・米俵・鯛等の縁起物を束ねたもので、「野の幸」・「山の幸」・「海の幸」を象徴したものです。別の言葉として「山苞」「海苞」「家苞」とも呼ばれています。苞というのは、外からは内部が見えない簡単な容器のことで、もともと山や海や家からの「贈り物」を入れるうつわのことでした。「山苞」は山の神の聖なる贈り物、「海苞」は海の神の聖なる贈り物、「家苞」は里の神の聖なる贈り物となるわけです。これを「市」でそれぞれ交換します。それぞれを「替える」わけです。これが「買う」という言葉になります。この「野の幸」・「山の幸」・「海の幸」を象徴した吉兆は、その中にこもる「御神徳」をいただく信仰を受け伝えたものです。

この吉兆を笹につけて参拝者は家路につきます。江戸期に作られた歌謡にも次のようにその状景が歌われています。

「十日戎のうりものは、はぜ袋に取鉢、銭かます、小判に金箱、立烏帽子、米箱、小槌、たばね鬘斗、笹をかたげて千鳥足」



今宮戎神社



御祭神

本社

天照坐皇大神

事代主命

素戔嗚命

月読命

稚日女命

摂社

大国主命

五男三女八柱神

末社

宇賀御魂神

祭事暦

毎月	一日	朔日祭
	十日	月次祭
一月	九日	宵宮祭(宵えびす)
	十日	大祭(本えびす)
	十一日	後宴祭(残り福)
六月	三十日	夏越大祓式
七月	三十一日	夏祭「こもえびす祭」
	三十三日	
十二月	三十一日	大祓式

御由緒

当社の創建は皇紀千二百六十年(西暦六百年)即ち推古天皇八年に聖徳太子が四天王寺建立に当たり、同地西方の守護神として鎮齋されたと伝えられています。

江戸時代に入ると十日戎のお祭りが始まり、元禄時代には今日と同じような祭礼となり、当時の記録・地誌等に盛大な様子を伝えていきます。

鯛に釣竿を持つえびす様は、そのお姿からも判るように、もとは漁業を司る神でしたが、四天王寺西門に浜の市が立ち、市の守り神として奉齋され、やがて貨幣経済の発展とともに商売繁盛・福德円満をくまなく授けて下さる神様となりました。

十日戎

豊臣時代の頃になりますと庶民のえびす様への信仰はより厚くなり、また豊臣秀頼は片桐且元に社殿造営の普請奉行を命じています。またこの頃より市街が発達し、大阪町火の活躍が始まり、江戸期になると大阪は商業の町としてより一層の繁栄を遂げ、それと期を併せて今宮戎神社も大阪の商業を護る神様として篤く崇敬されるようになります。十日戎の行事もこの頃から賑わいを見せ、延宝三年(一六七五)の現存する最も古い大阪案内の図「葦分舟」にも十日戎の状景が描かれています。明治には、それまでの問丸が雑喉場の魚市場、材木商組合、麻苧商組合、蠟商組合、漆商組合、金物商組合等が講社を結成し、十日戎はより一層盛んになりました。

このように時代とともに盛大になってゆく祭礼ですが、惜しくも昭和二十年の戦災で神社はことごとく焼失しました。しかしながら昭和三十一年には本殿が復興し、再び十日戎も活況を呈するようになり、現在では年の最初のお祭りとして十日戎の三日間に約百万人を超える参詣者があります。

